

短期大学におけるブライダル教育手法の一考察

－ PBL を適用した実践型教育の実践報告－

小 山 理 子

A Consideration of a Bridal Education in a College

－ The Report of a Study of a Practical Class applied PBL Theory for a Bridal Field －

Ayako KOYAMA

I はじめに

筆者は、本学紀要 50 集で、ブライダル分野への就職を希望する学生が、業界で求められているスキルや能力を習得するには、知識と実践の教育にとどまらず、実際の顧客相手に接客能力、問題発見・課題解決能力などを身に付けさせる全人的教育が重要であることを報告し、PBL を適用した新たな教育手法の提案を行った [1]。

しかしながら、授業実践を行う活動にまで発展させることができていなかった。今回は、PBL を適用した授業実践を行い、その取り組みについて報告する。具体的には、実在する人物をモデルにした本物の挙式の開催をテーマにした授業に取り組み、学習者による自己評価アンケートならびに学習者の意識変化の観点からの考察を行い、ブライダル教育としての効果を検証した結果の報告である。

II ブライダル分野の教育の方向性

ブライダル業界への就職は、国家資格が必要でもなく、就職において高度なスキルの習得が条件とはならない。そのため専門知識よりも主体性、ホスピタリティなどに代表される人間力が高く求められている。ブライダルサービス業界の取締役ならびに人材開発担当者に、人材育成の課題や求める人材像についてヒアリングした結果、業界で求める人材像についての業界から得た以下のようなコメントを得た。

- ・ブライダルはサービス業、何より人と接することが好きであることが必要
- ・人生の一大イベントであるブライダルを、この人に任せたいと思わせる信頼性が重要
- ・ブライダルが好きであることが大前提
- ・ブライダルへの情熱が必要

このような業界からの意見を重視すると、ブライダル教育で強化する方向は、より高度な専門知識ではなく、人間力や職業意識ということになる。

さらに、ブライダルの仕事で大切なことは、お客様である新郎新婦との関係性の構築、信頼性の構築である。お客様の要望に沿ってプランを企画立案し、商品化していくまでのストーリーが大切なのである。教育現場でも、信頼性の向上を意識した学びを展開させなければならない。特に、短期大学では、2年という短い在学期間において、専門的な知識と実践の教育にとどまらず、実際の顧客相手に接客能力、問題発見・課題解決能力などを身に付けさせる全人的教育を、いかに展開するかが新たな課題である。そこで、著者は、ブライダル教育の教育手法の検討にあたり、PBL に着目した。そもそも、PBL の教育目的は、「対象への全人格的投与と、それによって形成される全人格的發展」[5] であるとされている。この PBL の目的は、著者が目指すブライダル教育の目的と同じである。

III 事例報告 ～短期大学における授業実践～

上述の問題意識により取り組んだ授業実践として、

以下、短期大学における授業でのプロジェクトを紹介する。

1. 授業の概要

実践を行った授業は、短期大学2年生後期の必修科目である。2012年度の後期に、週1回、90分、15回実施し、履修した学生数は6名と、少人数での授業である。6名のため、グループ分けは行わず1グループとした。本授業を通じて、学生が、ブライダルの専門知識だけでなく主体性や人間性の習得へつながることを目的とした。そのため、具体的な学習到達目標として、①ブライダルの専門的な知識を習得すること、②キャリア意識を習得すること（職業意識や働く意欲）③就業力を高めること、の3点を設定した。

PBLではテーマ設定が最重要事項とも言われている。今回は、あらかじめシラバスで授業内容を提示していたため、学習者ではなく、教員がテーマを決定した。採用したテーマは、「Aさんの挙式を開催する」である。Aさんとは、もちろん架空の人物ではなく実在する人物で、授業実施期間中に結婚が決定していた女性である。Aさんのために学生が挙式を開催するという状況を作り出し、模擬ではない本物の挙式を開催した。テーマ設定においてこだわったポイントは次の3点である。①模擬ではない本物であること、②実現可能性が高いこと、③学生の有意義な経験や学びにつながることである。社会の本物に触れることを通じて、学びの意欲を引き出し、プロジェクトの実施を通じて成功体験を与え自信をつけさせ、主体的な学びへと導きたいためである。

2. 授業運営

さらに、授業のオペレーションでは、学習者中心の授業を心掛けた。学習者中心という視点は、学習者へ価値を提供するという視点である。学習者を授業のユーザーと捉えると、授業が「価値がある」と決めるのは指導者ではなく学習者である。そのため、学生が授業の価値評価を行えるように、授業運営においては、ブランド構築の視点を取り入れた。ブランドとは、受け手であるユーザーの感情の中に生まれるものであり、そのユーザーが価値を感じることでとされている[2]。具体的な授業のフレームは以下の通りである。

●学生への授業価値の提供方法

・第一段階 授業の「アイデンティティー」

シラバスと1回目のオリエンテーションを、アイデンティティー確立の段階とした。ここでは、授業の特性を伝え、既存の講義や実習と何が違うのかを説明する。ここで、このような意識の学生に対して、授業の意義を明示しておくことが大切となる。

・第二段階 授業の「ミーニング」

2回目の授業をミーニングの時間とした。具体的には、PBLのテーマ提示と授業の取り組み姿勢の提示である。ここで、授業の特性や学習イメージを学生に理解させるが、毎回の授業で各回の授業テーマを提示し、取り組む意味を再確認させていく必要もある。

・第三段階 学生からの「レスポンス」

これは、毎回の授業での取り組みでの実施とした。この授業を履修することで、何を身に付けて欲しいのか、社会とどう関係する学びなのかを説明し、それについてどうしたいか、意見交換の時間を取った。さらに、振り返りシートの提出をすることにした。また、毎回の授業で小さな成功体験を作り、この授業への肯定的な感情や参加する価値を創出するように努めた。

・第四段階 授業内での「リレーションシップ」

授業がなくては学生の能力は高まらないが、今回の授業は、自主学習なくては破綻する。そのため、授業と学生の関係は、一方通行ではなく双方向の関係で、お互いに協力して作り上げていくものという関係性を重視した。教員は授業進行のファシリテーターであり、学生の良き理解者（パートナー）、そしてプロジェクトの責任者という役割に徹した。

3. 学習プロセス

「挙式を開催する」というプロジェクトを遂行しながら適宜、必要となるブライダルの専門知識を教員がレクチャーしつつ、それぞれの段階で直面する課題に対して、グループで学習するスタイルで進行させた。それは、2つのスタイルのPBLを参考にした。2つのスタイルとは、①小グループごとにチューターが指導できる体制で行う問題発見解決型学習である「チュートリアル型PBL」と、②学生が特定の実践体験やP

プロジェクトをグループで遂行しながら学習を進める「社会連携型 PBL」[3] である。

また、授業は、PBL の 6 つの学習ステップ¹⁾ に従い (図 1)、筆者が考案した以下の学習プロセスに従って進行させた。

【ステップ 1 打ち合わせ】

PBL では、まずは問題に出会うことが最初の学習ステップとされている。挙式開催の場合、お客様である新郎新婦の要望やニーズを聞き出すことが、問題発見となるため、打ち合わせを最初のステップとした。この初回の打ち合わせでどこまでのヒアリングができるかが、学生にとっては最初の課題となる。

また、同時にブランド形成のプロセスも進行させる。この段階では、「アイデンティティー」の確立に向けて、新郎新婦の感情にも気を配ることが大切となる。

【ステップ 2 プランニング】

次に、グループワークにより、新郎新婦へのヒアリングをもとに、プランの検討を行う。これは、PBL のステップ 1 と 2 に対応する。新郎新婦の要望に対して、どうしたら応えることができるのかを考え、相互に話し合い、何を調べるかを明らかにさせる。

ここでのポイントは、新郎新婦の要望を取り入れる

だけでなく、自分たちのプランの「ミーニング」を追求することである。新郎新婦からの肯定的な感情を引き出すために、自分たちのプランの価値やそれを新郎新婦や来客に伝える方法を考えることが大切である。

【ステップ 3 自主学习】

これは、PBL のステップ 4 に相当する。ブライダル科目の PBL での自主学习とは、専門知識の獲得と主体性の向上の 2 つの内容となる。専門知識の獲得は、プランニングに必要となるブライダルの知識を、ブライダル専門の雑誌、本、インターネットなどで、自主的に調べて獲得させる。主体性の向上については、新郎新婦の要望や感情を察知し、それに対してどうしたらいいのかを授業中に指示するのではなく、自分はどうしたらいいのか、何ができるのかを考え、自主的に行動させた。

【ステップ 1～3 の繰り返し】

プランが完成するまでには、1 回の打ち合わせと検討のみでは無理である。現場でも何十回もヒアリングと検討を繰り返す。授業では時間的な制約があるため、ステップ 1～3 を少なくとも 2 回は繰り返すこととした。これは、「アイデンティティー」と「ミーニング」を深化させる狙いもある。新郎新婦の要望や感情を何

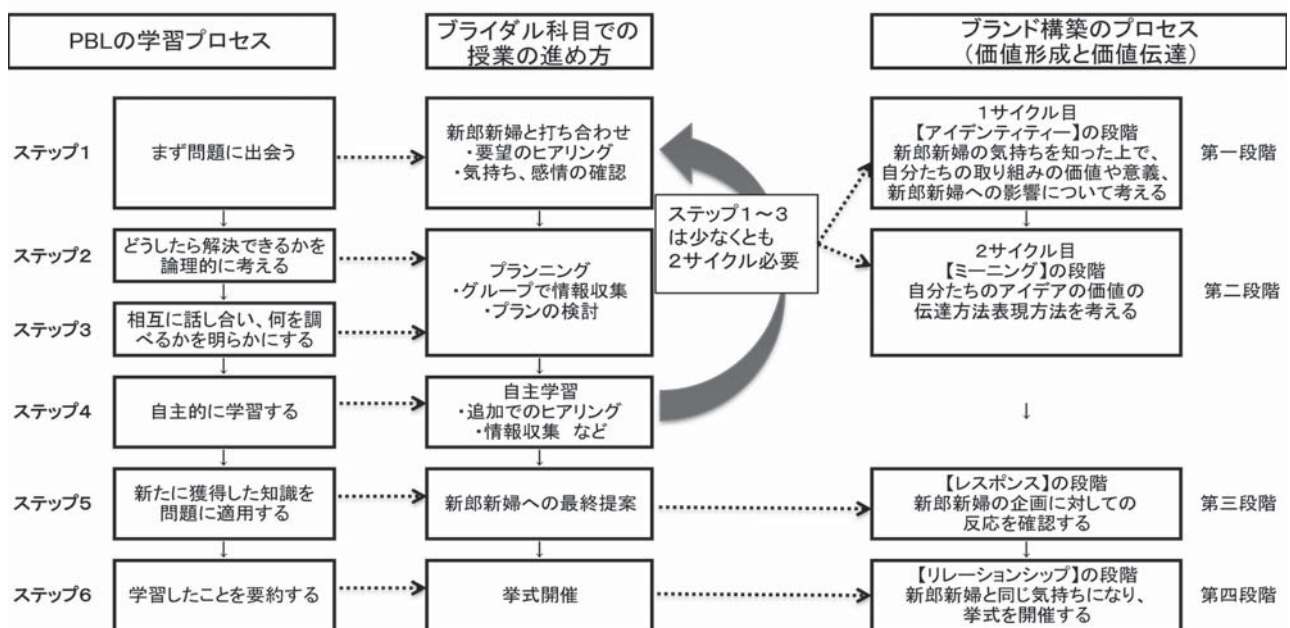


図 1 PBL を適用したブライダル科目の学習プロセス

度も確認することで、新郎新婦の気持ちを理解した上で、自分たちだからこそ出来ることは何かをより深く考えることができる。そのプロセスを数回繰り返すことで、新郎新婦と学生との「リレーションシップ」の構築へとつながる。

【ステップ4 提案】

プラン内容がまとまったら、次のステップの新郎新婦への提案となる。提案後の新郎新婦の反応を確認して、プランの再検討、本番に向けての準備を始める。ここでは、自分たちのプランの提案よりも、新郎新婦の「レスポンス」を確認することがより大切になる。「レスポンス」を確認して、伝達、提案プランに対する反応を確認した上で、プランの修正、本番に向けての準備をしなければならない。ここで、教員は、この提案で挙式本番を成功させられるか、新郎新婦は提案したプランを受け入れてくれているか、学生と新郎新婦との信頼関係は構築されつつあるかを確認し、プロジェクト全体をサポートする役割となる。

【ステップ5 挙式の開催】

挙式の開催は、PBLのステップ4の「学習したことを要約する」に対応する学習ステップとなる。これは、プロジェクトの集大成であり、新郎新婦のための一大イベントであると同時に、学生の学習成果の披露の場である。さらに、学生と新郎新婦のさらなる「リレーションシップ」を構築する機会ともなる。

学生は、当日までに、ウェルカムボード（写真1）などの会場装飾アイテムや案内状などのペーパーアイテムを作成し、当日は、司会進行、音響、ブライダルプランナー役まで、全てを学生のみで進行させた。校舎のエントランスでの開催ではあったが、立派な挙式となり、その空間が感動的な空気に包まれた（写真2）。感動のあまり涙を流す学生と新婦の姿が印象的だった。学生と新郎新婦がこの挙式に同じ価値や意義を感じ取った瞬間となった。

IV 授業評価

1. 学習の効果

今回の授業実践を通じての学生の学習効果の測定方法については、学生の自己評価を行った。評価項目は、



写真1 学生作成のウェルカムボード



写真2 挙式風景

設定した3つの学習到達目標の①ブライダルの専門的な知識を習得すること、②キャリア意識を習得すること（職業意識や働く意欲）③就業力を高めること、に対応させ、15項目を設定した。具体的な評価項は、上記の①は、ブライダルの知識の1項目、上記の②は、意欲、達成感の2項目、上記の③は、社会人基礎力として項目が挙げられている12項目である。各項目、とてもよく身に付いたから全く身に付かなかったまで、5段階評価とした。

結果の詳細を、表1に示す。6名の学生はほとんどがブライダルの専門知識を未習得の学生であったが、ブライダルの知識については、平均4.0と高い結果となった。その他、高い結果となったのは、傾聴力の4.2、柔軟性の4.0、状況把握力の4.0、意欲の4.0である。つまり、相手の立場になり、要望をヒアリングし、どうしたらいいのかを自主的に考えていくという姿勢が身に付いたということが言える。

表1 学生の自己評価結果

到達目標	評価項目 (大項目)	平均点	評価項目 (小項目)	平均点
①専門知識の修得	-	-	(1) プライダルの知識	4.0
②キャリア意識の向上	-	-	(2) 意欲	4.0
③就業力の修得 (社会人基礎力)	前に踏み出す力	3.6	(3) 達成感	3.8
			(4) 主体性	3.3
			(5) 働きかけ力	3.7
	考え抜く力	3.3	(6) 実行力	3.7
			(7) 課題発見力	2.5
			(8) 計画力	3.7
	チームで働く力	3.8	(9) 創造力	3.8
			(10) 発信力	3.8
			(11) 傾聴力	4.2
			(12) 柔軟性	4.0
			(13) 状況把握力	4.0
			(14) 規律性	3.5
			(15) ストレスコントロール力	3.5

また、授業アンケートでの自由記述に、この授業を通しての学んだことを書かせた。記述内容を分類すると、20件のコメントのうち、②の内容に関する記述が3件、③に関する記述が11件あった。20件のコメントの詳細は表2の通りである。

これらの結果から、①プライダルの専門的な知識を習得すること、②キャリア意識を習得すること（職業意識や働く意欲）③就業力を高めることの3つの学習到達目標は達成できたと言える。特に、キャリア意識について学生自らが考える姿勢が見られた。

さらに、評価について補足しておきたい点は、学習意欲についてである。積極的にこの授業を履修した学生が3名、なんとなく授業を履修した学生3名であった。意欲が比較的高かった学生の意欲も下がることなく、授業開始当初よりも高めることができ、意欲が低かった学生の意欲も高まったという結果を得られた。今回の授業のフレームワークは、メンバー全員の学習モチベーションを向上の施策の一手法としても有効的であるという示唆を得た。

表2 学生の感想

	学生の感想	分類
1	プライダルに関してあまり知識がなかったので、どうすればいいのか何をやればいいのかあまり分かりませんでした。	-
2	挙式をすると知らずに履修したので、正直、面倒だと思いましたが、準備するうちに、楽しくなってきました。	-
3	すごく軽い気持ちで授業を履修したので、やることが多く驚きました。	-
4	立場的にしっかりとしないといけない、欠席したらいけないなど不安も感じました。	③
5	頑張ってきて良かったと思え、メンバーにも先生にも感謝です。	②
6	達成感とやって良かったという感動がありました。	②
7	役割分担やチームワークが大切で、このようなことは1人では無理だということを改めて実感しました。	③
8	物事に対してしっかりとやる気を持って取り組んだら、その結果がきちんとついてくるということを学びました。	③
9	プランナーの大変さや仕事のやりがいがあった気がします。	②
10	実際、自分は全力で準備した訳でもなく、何も出来ていなかった。当日になり、もっと積極的に頑張ったら良かったと反省しました。	③
11	もっと頑張っていたら、当日もっと感動できたのにと後悔しました。	-
12	準備も言われたことをやるだけでアイデアを出したりしなかったのが、頑張っているメンバーに申し訳なかったと反省しました。	-
13	自分もこのような挙式ができるようになりたいがまだまだ自分はダメだと思いました。	-
14	人と協力することや、自分から進んでやることの大切さ分かりました。もっと自分が成長できるようになりたいです。この感動を忘れずに社会に出ていきたいです。	③
15	物事に対してこれからもっとやる気、気合いを入れしっかりと取り組みたいと思いました。	③
16	社会人になったら今よりもっと人と関わる機会が増えるし、協力していかないといけないと思っています。この授業での経験を生かしたいです。	③
17	授業を通じて改めて自分のやりたことが再確認できたように思います。将来の仕事に生かしていきたいです。	②
18	今まではあまり積極的ではなかったので、新しい事にどんどんとチャレンジしたい。	③
19	プライダルの知識があまりなくても、みんなと一緒に頑張ればここまでことがやれることを実感しました。	③
20	協力することの大切さだけでなく、自分から進んでやってみることも大切だと分かりました。今回それが出来たと思います。	③

さらに、お客様である新郎新婦との関係性の構築、信頼性の構築が成されたかどうか、今回のお客様である新婦・Aさんの感想から考察する。挙式後のAさ

んの感想は以下の通りである。

「学生の皆から、私たちの授業で挙式をさせていただきと頼まれ、まさか、授業の一環とは思っていませんでしたので、驚きました。しかし、もっと驚かせてくれたのは、その時の皆の表情です。皆が本当に素敵な表情で『お願いします』とお願いしてくれました。あの時の皆の表情が忘れられません。

今まであまりお話もしたことがないのに、祝福してくれ、授業時間外にも、『好きな色は何ですか?』、『どんなイメージが好きですか?』とわざわざ聞きにきてくれました。

授業の取り組みとして実施することが決まっていたのですが、ある学生はこっそりと、『本当に挙式を取り組ませてもらってもいいの?』と、そんなことまで気遣ってくれました。人前に出るのも苦手で、皆に披露できるような私たちでなかったため、本当はお断りしようと思っていた。そんな、何とも言えない気遣いや皆の温かい表情が私たち二人の気持ちを動かしてくれました。

上を見れば、もっとレベルの高いブライダルプランナーさんはたくさんいますが、これから勉強したり経験したらずぐに身に付きます。でも、皆がしてくれたやさしい気遣いや温かな表情は、なかなかできるものでないと思います。やさしい気遣いや温かな表情は人をも動かす力になるのだと、皆に教えてもらいました。

こんなにかわいらしくて、キラキラした皆に挙式をプロデュースしてもらえた私たちは本当に幸せです。」

この感想から、Aさんは当初はこの挙式に乗り気ではなかったことが分かる。それが、挙式に協力し、最後には感動し、学生への感謝の気持ちを表している。学生のAさんへの気遣い、授業への意欲が、Aさんの気持ちを変化させたのである。この要因を考察すると、まずこの取り組みは、他の挙式とは違い、特別な意味合いを持っているという「アイデンティティー」と「ミーニング」を学生が発信し、Aさんが受け取った。その後、「レスポンス」として、学生の心遣いや表情に対してAさんが協力的な対応をしてくれた。そして、「リレーションシップ」として、Aさんと学生との信頼関係やお互いに挙式の価値を作っていく関

係が構築された。挙式の企画、立案、提案のプロセスの中に、ブランド・ビルディング・ブロックの理論を取り入れたことにより、学生は自発的にお客様の気持ちに寄り添い、信頼関係の構築していく意識が生まれた。

2. 学習者の意識変化

今回のプロジェクトを学習者の意識変化から分析すると、①「信頼」→②「責任」→③「参加」→④「振り返り」→⑤「再挑戦」の5段階の意識変容(図2)を確認できた。プロジェクトの実施には、まずは、①の「信頼」が必要であった。教員と学生とはもちろんのこと、学生と学生との信頼関係の構築が何よりも大切である。教員は、一緒に学生の課題に解決していくメンバーである、という姿勢を貫いた。それにより、チームとしての意識が高まり、信頼関係が生まれた。次に、②の「責任」を学生に感じさせることが大切となる。初回の授業では、「何をやるのか分かっていなかった」「軽い気持ちで履修した」「単位が取得できればいいと思い履修した」という学生がほとんどであった。それが次第に、「立場的にしっかりとしないといけない、欠席したらいけない」と責任感を持つようになった。その後、自分の役割に責任を持つことで、③「参加」していく姿勢が見られた。頑張っているメンバーに申し訳ないから、積極的に関わっていくという気持ちを感じられた。「役割分担やチームワークが大切で、このようなことは1人では無理」、「協力することの大切さだけでなく、自分から進んでやってみることも大切」という感想から積極的な参加意識が見受けられる。さらに、④「振り返り」の姿勢である。「もっと積極的に頑張らないといけない」「頑張ってるメンバーに申し訳ない」「まだまだ自分はダメだ」と、自然に自己分析や他者理解、内省の態度が見られた。振り返りの姿勢が見受けられると自ずと、⑤「再挑戦」したいという気持ちが高まってきた。「もっと自分が成長できるようになっていきたい」「この感動を忘れずに社会に出ていきたい」「物事に対してこれからもっとやる気、気合いを入れ、しっかり取り組みたい」という感想に代表されるように、新たな意欲が創出されていた。

この「信頼」→「責任」→「参加」→「振り返り」→「再挑戦」への学生の意識変容は、PBLとブランド・

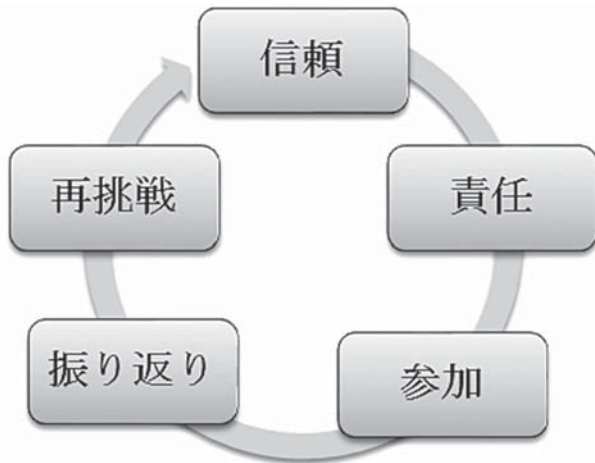


図2 実践型プライダル科目の成功の要素（学生の意識変容）

ビルディング・ブロック理論を適用したことにより生まれたのではないかと感じる。この意識変容は、今回の授業実践を成功に導くため要素であったことを述べておきたい。

V まとめ

本稿では、プライダル教育へのPBLの授業実践を行い、その学習効果を検証した。その結果、学習者による自己評価の結果から判断する限りでは、①プライダルの専門的な知識を習得すること、②キャリア意識を習得すること（職業意識や働く意欲）③就業力を高めることの3つの学習到達目標は達成できた。

今後の課題としては、まず、大人数授業での実践と評価である。今回の授業実践は、少人数授業での取り組みのため、比較的効果が得られやすかったと思われる。大人数授業での適用可能性を探らなければならない。そして、今回の取り組みを体系化し、汎用性のあるカリキュラムを作成していくことが必要である。さらに、今回の授業実践を通じて、PBLの授業を成功に導くためのキーワードとして、「信頼」「責任」「参加」「振り返り」「再挑戦」をまとめた。これらのキーワードが、他の授業でも適用が可能であるかさらに探ることも課題である。そのために、さらなる授業実践とその効果の検証を積み重ねたい。

注

1) PBLの定義は「一定期間内に一定の目標を実現

するために、自律的・主体的に学生が自ら発見した課題に取り組み、それを解決しようとチームで協働して取り組んでいく、創造的・社会的な学び」であり、学習ステップのプロセスとともに学生が自発的に学ぶようになることにも特徴がある。PBLの学習ステップは、B. マジェンダの以下の6ステップを参考にした。

● PBLの学習ステップ

- (1) まず問題に出会う
- (2) どうしたら解決できるかを論理的に考える
- (3) 相互に話し合い何を調べるかを明らかにする
- (4) 自主的に学習する
- (5) 新たに獲得した知識を問題に適用する
- (6) 学習したことを要約する

出典：B. マジェンダ、竹尾恵子『PBLのすすめ—教えられる学習から自ら解決する学習へ—』、学習研究社、2007年。

参考文献

- [1] 小山理子「短期大学におけるプライダル教育手法の一考察—PBLを適用した実践型教育の提案—」、京都光華女子大学短期大学部、『研究紀要第50集』、2012年、41-47ページ
- [2] ケビン・レーンケラー、恩蔵直人、亀井昭宏『ケラー戦略的ブランド・マネジメント』、東急エージェンシー、2000年
- [3] 井上明、金田重郎「実システム開発を通じた社会連携型PBLの提案と評価」、情報処理学会論文誌49(2)、2008年、930-943ページ
- [4] B. マジェンダ、竹尾恵子『PBLのすすめ—教えられる学習から自ら解決する学習へ—』、学習研究社、2007年
- [5] 同志社大学PBL推進支援センター「自律的学習意欲を引き出す！ PBL導入のための手引き」（同志社大学）、2012年
- [6] 小山理子、井上明「産学連携型PBLにおけるカリキュラムの体系化」、甲南大学情報教育センター『情報教育センター紀要第12号』、2013年、41-52ページ

